

学齢期の神経発達症児を育てる養育者が集う意義

—療育プログラムの「親の会」における会話の分析から—

The Meaning of Parents' Gathering of Parents of School-Age Children with Neurodevelopmental Disorders: An Analysis of Conversations in the Parent Support Group of a Care and Education Program

○佐野さやか¹⁾・荒木穂積²⁾

○Sayaka SANO, Hozumi ARAKI

¹⁾ 立命館大学総合心理学部・²⁾ 立命館大学大学院人間科学研究科

¹⁾ Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology・²⁾ Graduate School of Human Science

Key words: 親の会, 神経発達症, テーマ分析

目的

本療育プログラムは、主に神経発達症のある児を対象に20年にわたって開催されており、これまでその成果について多々発表をしてきた（竹内ら, 2023）。一方、子どもたちがプログラムに参加している間、別室で「親の会」と称して集い、語り合っている養育者たちに焦点を当てた研究はまだ行われていない。

神経発達症児を育てる養育者は、養育ストレスが高く、精神的健康の問題が顕在化することから（Yorke et al., 2018）、近年では神経発達症のある子ども本人に対する支援と同時に、ピアサポートなどの養育者に対する支援の重要性が強うたわれている。本「親の会」もピアサポートの機能を果たしていることが推察されるが、その具体的な様相は明らかでない。そこで本研究では、「親の会」における養育者の語りを分析することにより、養育者たちが集う意義について探索的に検討する。

方法

本療育プログラムは現在2か月に1回の頻度で開催されており、「親の会」は養育者およびファシリテーターにより構成される。時間は1時間半程度である。

本研究では、X年5月の本療育プログラムに参加した学齢期の神経発達症児を育てている養育者2名、およびファシリテーター1名の発言内容を対象とした。養育者2名に対しては、調査開始前に研究目的や方法について説明し、研究協力および録音に関して書面による同意を得た。録音された発言内容は、著者らによって逐語録が作成され、分析された。

分析は、Braun et al. (2006)のテーマ分析の手順に基づいて行われた。手順とは①データへの精通、②初期コードの生成、③テーマの探索、④テーマのレビュー、⑤テーマの定義と命名、⑥報告書の作成という6つのフェーズである。一連の分析は、まず第一著者によって行われ、その後第二著者との合議により検討、決定された。

なお、今回対象となった2名は、本療育プログラムに3年ほど参加しており、すでに一定の関係性は築かれている。

結果

対象者2名の語りについてテーマ分析を行った結果、4つのテーマが生成された（表1）。

表1 「親の会」で語られたテーマ

テーマ	特徴
子どもの療育活動内容に関する説明・承諾	ファシリテーターから子どもの療育活動に関する説明を受け、子どもが安心できる場であることを確認し、承諾する。
子どもの特徴や対応についての話し合い	日常生活における出来事や、その際の子どもの反応や周囲の対応、さらには子どもの特徴や特性について、整理して振り返る。また同様の状況が他の家庭でも生じていることを共有し、子どもの特徴や対応に関する新たな考え方や工夫について気づきを得る。
養育者自身の気持ちの吐露と共感	子どもと関わる際の自身の気持ちや考えを吐露し、共感し合うことによって、子育てに重なる仲間を感じ、情緒的なサポートを受ける。
情報交換や共有	学校のサポート体制や神経発達症の人の特徴等、一般的な情報を交換することによって、子どもの理解や対応に役立つ情報を蓄積する。

考察

本研究では、神経発達症のある子どもを育てている養育者が「親の会」に集う意義について、「親の会」で語り合われた内容から探索的に検討した。その結果、養育者たちは、子どもの療育活動が安全に行われるか確認したうえで、日常の子どもの様子や周囲の対応を整理し、振り返り、他の家庭と共有することにより、新たな気づきを得ようとしていることが推察された。また、養育者同士で語り合うことは、養育者同士の仲間意識を高め、情緒的サポートにつながるとともに、新たな情報を獲得するきっかけともなっていると考えられた。今後は、継続的な参加やメンバー構成の変遷等によるテーマの変化や、定量的調査やインタビュー調査による多角的な視点での検討が求められる。

引用文献

Braun, V. et al. (2006). Using thematic analysis in psychology.

Qualitative research in psychology, 3(2), 77-101.

竹内 謙彰他（編）(2023). インクルーシブ社会研究22—療育プログラム開発の20年. 立命館大学人間科学研究所.

Yorke, I. et al. (2018). The Association Between Emotional and Behavioral Problems in Children with Autism Spectrum Disorder and Psychological Distress in Their Parents: A Systematic Review and Meta-analysis. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 48, 3393-3415.